

大学生における携帯電話の使用状況と依存傾向について

上 濱 龍 也 ・ 清 水 茂 幸 ・ 澤 村 省 逸 ・ 清 水 将*

(2013年1月8日受理)

1. はじめに

携帯電話は、1979年にサービスを開始した自動車電話に始まり、ショルダーフォン、さらに1987年に初めてハンディタイプの無線電話が登場した¹⁾。その後、小型化が進み、90年代後半にはメールサービスが開始され、携帯電話は単なる移動電話から幅広いコミュニケーションツールになってきた。さらに99年にはインターネットにも接続できるようになり、情報ツールへと変化しその後の10年間で電話、メール、インターネット、カメラ、テレビと複合的な情報・コミュニケーションツールへ進化してきた。この急速な進化を経て、近年では携帯電話と小型パソコンの機能が統合されたスマートフォンへと機能の高度化が進んできた。このように、急激に進化してきた携帯電話であるが、総務省の調査結果²⁾によると、1993年ではその普及率はわずかに3.2%であったが、2000年には78.5%、2011年には94.5%と短期間で保有率が90%以上になった。

現在主流になりつつあるスマートフォンについて「スマートフォンユーザーの実態把握調査」³⁾によると、使用者の74.5%がスマートフォンを“生活必需品”と思っていることが明らかとなり、「情報収集がしやすい」51.9%、「遊び道具である」42.6%、「パソコン代わりに使う」41.7%、「時間を効率的に使える」36.3%、といった意見があった。また、アプリケーションについては、無料/有料問わず「ゲーム」、「交通/地図」、「ビジネス」などの使用が多く見られ、使用方法については、「趣味・実益派」、「通話・メール中心派」、「エンタメ派」など多様な使用形態に分かれていた。これは、以前の通話を中心とした携帯電話の使用実態とは変化し、情報端末ツールとして使用されることが多くなったことを示している。

これまで、情報端末ツールはパーソナルコンピュータを介したネットワークがその役割を担ってきた。しかし、同時に個人ユーザーが増加し、インターネットゲームなどの長時間使用、インターネット上の掲示板を利用したいじめ、恐喝や殺人などの凶悪犯罪予告の事例がみられるなど、様々な社会問題も起こってきた。戸部ら⁴⁾はインターネット依存傾向とメンタルヘルスおよび心理・社会的変数（人間関係、コミュニケーション、攻撃衝動、規範意識等）間の有意な関連性を明らかにし、インターネット使用と心理・社会的発達等の関連を検討する際には、使用時間以上に依存傾向に着目する必要があることを示した。また中学生・高校生の携帯メール送信頻度がメンタルヘルスや心理・社会的問題性と関連していることを示した。機能の

* 岩手大学教育学部

多様化やスマートフォンの普及に伴って、今後携帯電話においてもこのような問題がこれまで以上に発生する可能性が考えられる。

そこで本研究は、携帯電話の所有率がほぼ100%となり、なおかつ比較的自由に使用の機会がある大学生を対象に携帯電話の使用状況と依存傾向について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

大学生における携帯電話の使用状況を把握するとともに、携帯電話への依存傾向を調べることが目的として、アンケート調査を行った。

調査対象は、I大学の健康、スポーツ関連の講義を受講した大学生294名を対象とした。8月～9月に調査用紙を配布し、携帯電話を所有していない者および調査項目に未回答項目のある者を除き、すべての項目に回答が得られた278名（男子152名、女子126名）（有効回収率95.2%）を分析対象とした。

調査は、携帯電話のタイプや用途、使用時間、使用機能等の携帯電話の使用実態に関する質問16項目、携帯電話の依存についての質問17項目からなる全33項目のアンケートを実施した。なお、依存に関する項目は、鄭⁵⁾の調査項目を基に携帯電話向けに変更を加え、「全くない（1点）」から「いつもそうだ（5点）」までの5段階で回答させた。

統計解析はSPSS Statistics 17.0を用い、使用時間や依存度合計得点などの平均値の検定にはT検定を、依存に関するアンケート各項目の検定にはマン・ホイットニU検定およびカイ二乗検定を用いた。有意水準は5%とした。

3. 結果

対象者の平均年齢は、 19.5 ± 0.98 歳、男子は 19.7 ± 0.98 歳、女子は 19.2 ± 0.93 歳で、男女間に有意差が認められた（ $p < 0.001$ ）。（表1）年齢別の割合では、男子は20歳（40.1%）、女子は19歳（42.1%）が最も多く、4年生に該当する21歳以上の割合が少なかった。（表2）また、携帯電話の使用開始年齢をみると、全体では 15.0 ± 1.58 歳、男子は 15.1 ± 1.13 歳、女子は 14.7 ± 1.97 歳と男女間に有意差が認められ（ $p = 0.034$ ）、女子の方が早い年齢から使用していた。

表1 対象者の平均年齢および使用開始年齢

	平均年齢	平均使用開始年齢
全体 (n = 278)	19.5 ± 0.98	15.0 ± 1.58
男 (n = 152)	19.7 ± 0.98	15.1 ± 1.13
女 (n = 126)	19.2 ± 0.93	14.7 ± 1.97

平均±標準偏差

} $p < 0.001$ } $p = 0.034$

大学生における携帯電話の使用状況と依存傾向について

表2 対象者の年齢構成

	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳以上	n (%)
全体 (n=278)	46 (16.5)	105 (37.8)	94 (33.8)	23 (8.3)	10 (3.6)	
男 (n=152)	16 (10.5)	52 (34.2)	61 (40.1)	15 (9.9)	8 (5.3)	p=0.003
女 (n=126)	30 (23.8)	53 (42.1)	33 (26.2)	8 (6.3)	2 (1.6)	

携帯電話のタイプについてみると、男女ともに一般型の携帯電話を使用している割合が高く、スマートフォンの使用者は男子（24.3%）、女子（10.3%）と低い割合となった。（表3）また、年代別および性別にみると、特段の傾向は認められなかった。

携帯電話の1日当たりの平均使用時間は全体では106.7±126.22分で、性別にみると男子は85.3±106.47分、女子は132.5±142.77分と個人差が非常に大きいものの女子の方が有意に長い時間使用している状況が認められた（p=0.002）。また、携帯電話のタイプ別にみると一般のタイプでは101.8±117.51分、スマートフォンでは128.7±159.64分とスマートフォンの方が長時間の傾向は示したものの有意な差ではなかった。（表4）

携帯電話使用時間の内訳をみると、メールの平均使用時間は全体では30.3±46.09分、男子は18.6±26.44分、女子は44.4±59.12分と男女間に有意な差が認められた（p<0.001）。さらにインターネットの平均使用時間は全体では41.2±54.28分、男子は32.6±36.03分、女子は51.5±69.03分とメールと同様に女子の方が有意に長時間使用していた（p=0.006）。一方、電話、ゲームでは男子の方が女子より長い時間使用している傾向ではあったが、有意差は認められなかった。携帯電話のタイプ別にみると、ゲームでの使用が一般のタイプでは5.8±17.66分であったのに対し、スマートフォンでは15.7±24.36分とスマートフォンの使用時間が有意に長いことが示された（p=0.008）。（表5, 6）

表3 使用している携帯電話のタイプと年齢および性別の割合

		18歳	19歳	20歳	21歳	22歳以上	合計
全体 (n=278)	一般のタイプ (n=228)	37 (80.4)	90 (85.7)	76 (80.9)	17 (73.9)	8 (80.0)	228 (82.0)
	スマートフォンタイプ (n=50)	9 (19.6)	15 (14.3)	18 (19.1)	6 (26.1)	2 (20.0)	50 (18.0)
男 (n=152)	一般のタイプ (n=115)	9 (56.3)	43 (82.7)	46 (75.4)	11 (73.3)	6 (75.0)	115 (75.7)
	スマートフォンタイプ (n=37)	7 (43.8)	9 (17.3)	15 (24.6)	4 (26.7)	2 (25.0)	37 (24.3)
女 (n=126)	一般のタイプ (n=113)	28 (93.3)	47 (88.7)	30 (90.9)	6 (75.0)	2 (100.0)	113 (89.7)
	スマートフォンタイプ (n=13)	2 (6.7)	6 (11.3)	3 (9.1)	2 (25.0)	0 (0.0)	13 (10.3)

※ () 内の値は各年齢・性別の人数に対する割合

表4 性別および携帯電話の種類別にみた1日当たりの使用時間 平均±標準偏差

		一日の使用時間 (分)	p 値
全 体		106.7 ± 126.22	
性 別			
	男 (n=152)	85.3 ± 106.47	0.002
	女 (n=126)	132.5 ± 142.77	
携帯電話の種類			
	一般のタイプ (n=228)	101.8 ± 117.51	0.173
	スマートフォンタイプ (n=50)	128.7 ± 159.64	

表5 性別にみた携帯電話の使用内訳 平均±標準偏差

	全体	性別		p 値
		男 (n=152)	女 (n=126)	
電話	10.6 ± 60.65	12.6 ± 81.39	8.3 ± 11.79	0.558
メール	30.3 ± 46.09	18.6 ± 26.44	44.4 ± 59.12	<0.001
ツイッター	10.7 ± 42.29	6.9 ± 26.97	15.4 ± 55.18	0.114
インターネット	41.2 ± 54.28	32.6 ± 36.03	51.5 ± 69.03	0.006
ゲーム	7.6 ± 19.37	9.5 ± 23.19	5.4 ± 13.13	0.066
動画観賞	2.3 ± 8.33	2.4 ± 8.30	2.1 ± 8.40	0.775
テレビ	5.6 ± 24.15	3.0 ± 14.41	8.8 ± 31.99	0.061
音楽	8.1 ± 21.16	7.9 ± 20.23	8.4 ± 22.31	0.866

表6 携帯電話の種類別にみた使用内訳 平均±標準偏差

	携帯電話の種類別		p 値
	一般のタイプ (n=228)	スマートフォンタイプ (n=50)	
電話	6.4 ± 10.53	29.8 ± 140.80	0.247
メール	31.8 ± 48.88	23.7 ± 29.73	0.265
ツイッター	10.4 ± 44.49	12.1 ± 30.65	0.798
インターネット	41.2 ± 57.96	41.2 ± 33.12	1.000
ゲーム	5.8 ± 17.66	15.7 ± 24.36	0.008
動画観賞	1.9 ± 7.71	4.1 ± 10.62	0.163
テレビ	5.4 ± 24.78	6.8 ± 21.23	0.706
音楽	6.5 ± 19.60	15.4 ± 26.18	0.028

表7 性別および携帯電話の種類別にみた依存度得点 平均±標準偏差

		依存度得点	p 値
全 体		-32.6 ± 10.58	
性 別			
	男 (n=152)	31.1 ± 10.91	0.010
	女 (n=126)	34.4 ± 9.91	
携帯電話の種類			
	一般のタイプ (n=228)	32.4 ± 10.83	0.560
	スマートフォンタイプ (n=50)	33.4 ± 9.43	

大学生における携帯電話の使用状況と依存傾向について

依存傾向に関する質問についてみると、総合得点は、全体では 32.6 ± 10.58 点 ($\alpha = 0.92$) であった。男女別では、男子は 31.1 ± 10.91 点 ($\alpha = 0.93$)、女子は 34.4 ± 9.91 点 ($\alpha = 0.91$) と女子の方が有意に高い得点を示した ($p = 0.010$)。さらに得点分布では、最低得点17点から最高得点85点までの中で、下位25%に相当する24点未満(平均2点未満)の学生は男子96名(63.2%)、女子62名(49.2%)であった。一方、75%以上に相当する68点以上(平均4点以上)の高得点が男女各1名おり、この2名を含む50%以上(平均3点以上)の学生は男子8名(5.3%)、女子8名(6.3%)であった。また、中間層である25%~50%に相当する34点以上67点以下(2点以上4点未満)の学生は男子48名(31.6%)、女子56名(44.4%)であった。なお、携帯電話のタイプ別では、有意な差は認められなかった。(表7)

そこで、質問項目ごとに男女を比較してみると、すべての項目において、女子の方が高いまたは男女で同じ得点であった。女子の方が有意に高い得点を示した項目は8項目であった。問11.『思っていたよりも長く使用していた経験がありますか』では、男子が 2.9 ± 1.08 点、女子が 3.2 ± 1.03 点 ($p = 0.019$)、問14.『周囲の誰かに、使用時間について文句(または注意)を言われたことがありますか』は、男子が 1.6 ± 0.93 点、女子が 1.9 ± 0.82 点 ($p = 0.003$)、問15.『他にしなければいけない事がある時でも、携帯電話の使用を優先しますか』は、男子が 1.9 ± 0.92 点、女子が 2.1 ± 0.95 点 ($p = 0.048$)、問17.『携帯電話上で楽しむ事を考えて、現実の生活の問題から逃避したことがありますか』は、男子が 1.7 ± 1.01 点、女子が 2.0 ± 1.01 点 ($p = 0.005$)、問18.『携帯電話を使用するのを楽しみにしている自分を意識することがありますか』は、男子が 1.8 ± 0.96 点、女子が 2.1 ± 1.00 点 ($p = 0.007$) と有意差が認められた。さらに、問21.『深夜に使用するため、睡眠不足になることがありますか』では、男子が 1.8 ± 0.98 点、女子が 2.2 ± 0.99 点 ($p = 0.001$)、問22.『使用中に「あと2、3分だけ」と自分に言い訳しますか』は、男子が 1.8 ± 1.01 点、女子が 2.4 ± 1.22 点 ($p < 0.001$)、問27.『使用時間を短くしようと試みて失敗したことがありますか』は、男子が 1.3 ± 0.63 点、女子が 1.7 ± 0.88 点 ($p < 0.001$) といずれも女子が有意な高い得点を示した。

表8 依存度に関する各質問項目の平均得点の男女比較

平均±標準偏差

	全体	男	女	p 値
Q11 長時間の使用経験	2.99 ± 1.07	2.8 ± 1.08	3.2 ± 1.03	0.019
Q12 友人より携帯が楽しい	1.83 ± 0.84	1.8 ± 0.86	1.9 ± 0.82	0.062
Q13 携帯での出会い	1.96 ± 0.99	1.9 ± 0.99	2.0 ± 0.98	0.560
Q14 使用時間に対する注意	1.77 ± 0.93	1.6 ± 0.93	1.9 ± 0.91	0.003
Q15 携帯使用を優先する	2.03 ± 0.94	1.9 ± 0.92	2.1 ± 0.95	0.048
Q16 学習や成績に影響	2.17 ± 1.06	2.1 ± 1.10	2.3 ± 1.02	0.075
Q17 現実生活からの逃避	1.86 ± 1.02	1.7 ± 1.01	2.0 ± 1.01	0.005
Q18 携帯使用を楽しみにしている	1.97 ± 0.99	1.8 ± 0.96	2.1 ± 1.00	0.007
Q19 携帯がないと退屈で不安	2.32 ± 1.02	2.3 ± 1.08	2.4 ± 0.94	0.338
Q20 使用を中断されるとイライラする	1.60 ± 0.80	1.6 ± 0.85	1.6 ± 0.73	0.832
Q21 深夜使用による睡眠不足	1.98 ± 1.00	1.8 ± 0.98	2.2 ± 0.99	0.001
Q22 使用時間を自分に言い訳する	2.07 ± 1.16	1.8 ± 1.01	2.4 ± 1.22	0.000
Q23 長時間使用を隠そうとする	1.51 ± 0.82	1.4 ± 0.85	1.6 ± 0.78	0.023
Q24 使用内容を秘密にする	1.90 ± 0.99	1.9 ± 1.09	1.9 ± 0.86	0.137
Q25 使用できないと機嫌が悪くなる	1.51 ± 0.78	1.5 ± 0.83	1.5 ± 0.71	0.674
Q26 使用できない時に使う事を空想する	1.48 ± 0.75	1.5 ± 0.79	1.5 ± 0.71	0.276
Q27 使用時間の短縮に失敗した	1.48 ± 0.77	1.3 ± 0.63	1.7 ± 0.88	0.000

表9 依存度に関する各質問項目の男女別分布

					n (%)	
		1または2	3	4または5	χ^2 値	p値
Q11 長時間の使用経験	男	51 (33.6)	61 (40.1)	40 (26.3)	7.997	0.091
	女	32 (25.4)	46 (36.5)	48 (38.1)		
Q12 友人より携帯が楽しい	男	135 (88.8)	9 (5.9)	8 (5.3)	7.713	0.145
	女	104 (82.5)	16 (12.7)	6 (4.8)		
Q13 携帯での出会い	男	109 (71.7)	31 (20.4)	12 (7.9)	2.529	0.961
	女	92 (73.0)	24 (19.0)	10 (7.9)		
Q14 使用時間に対する注意	男	126 (82.9)	18 (11.8)	8 (5.3)	12.169	0.315
	女	96 (76.2)	23 (18.3)	7 (5.6)		
Q15 携帯使用を優先する	男	113 (74.3)	32 (21.1)	7 (4.6)	4.236	0.371
	女	84 (66.7)	34 (27.0)	8 (6.3)		
Q16 学習や成績に影響	男	99 (65.1)	41 (27.0)	12 (7.9)	10.152	0.482
	女	74 (58.7)	38 (30.2)	14 (11.1)		
Q17 現実生活からの逃避	男	124 (81.6)	17 (11.2)	11 (7.2)	11.464	0.078
	女	88 (69.8)	26 (20.6)	12 (9.5)		
Q18 携帯使用を楽しみにしている	男	121 (79.6)	20 (13.2)	11 (7.2)	11.727	0.004
	女	79 (62.7)	36 (28.6)	11 (8.7)		
Q19 携帯がないと退屈で不安	男	94 (61.8)	37 (24.3)	21 (13.8)	5.292	0.387
	女	74 (58.7)	39 (31.0)	13 (10.3)		
Q20 使用中断されるとイライラする	男	134 (88.2)	13 (8.6)	5 (3.3)	3.701	0.814
	女	114 (90.5)	9 (7.1)	3 (2.4)		
Q21 深夜使用による睡眠不足	男	120 (78.9)	20 (13.2)	12 (7.9)	12.270	0.023
	女	82 (65.1)	32 (25.4)	12 (9.5)		
Q22 使用時間を自分に言い訳する	男	116 (76.3)	25 (16.4)	11 (7.2)	27.925	0.001
	女	73 (57.9)	27 (21.4)	26 (20.6)		
Q23 長時間使用を隠そうとする	男	137 (90.1)	9 (5.9)	6 (3.9)	8.750	0.525
	女	112 (88.9)	11 (8.7)	3 (2.4)		
Q24 使用内容を秘密にする	男	117 (77.0)	21 (13.8)	14 (9.2)	13.327	0.451
	女	98 (77.8)	21 (16.7)	7 (5.6)		
Q25 使用できないと機嫌が悪くなる	男	135 (88.8)	12 (7.9)	5 (3.3)	3.816	0.660
	女	116 (92.1)	7 (5.6)	3 (2.4)		
Q26 使用できない時に使う事を空想する	男	138 (90.8)	10 (6.6)	4 (2.6)	6.131	0.929
	女	116 (92.1)	7 (5.6)	3 (2.4)		
Q27 使用時間の短縮に失敗した	男	144 (94.7)	7 (4.6)	1 (0.7)	17.757	0.017
	女	108 (85.7)	11 (8.7)	7 (5.6)		

また、有意差は認められなかったものの、問12.『友人と仲良くするよりも、携帯電話をしようしている方が楽しいですか』では、男子 1.8 ± 0.86 点、女子が 1.9 ± 0.82 点 ($p = 0.062$)、問16.『携帯電話の使用が原因で、学習の能率や成績に悪影響を与えていますか』は、男子 2.1 ± 1.10 点、女子が 2.3 ± 1.02 点 ($p = 0.075$) と、人間関係や学習への影響に関する項目で女子の方が、高い得点傾向を示した。(表8) そこで、依存度に関する各質問項目の回答について、「1 全くない」と「2 めったにない」合わせた群、「3 時々ある」と回答した群、「4 たびたびある」と「5 いつもそうだ」を合わせた群に分けて分布をみた。(表9) その結果、問18.『携帯電話を使用するのを楽しみにしている自分を意識することがありますか』は、女子の「時々ある」と答えた割合が28.6%と高く、さらに男女での分布に有意な差 ($\chi^2 = 11.724$ 、

p=0.004) が認められた。また、問21.『深夜に使用するため、睡眠不足になることがありますか』($\chi^2=12.270$, p=0.023)、問22.『使用中に「あと2, 3分だけ」と自分に言い訳しますか』($\chi^2=27.925$, p=0.001)、問27.『使用時間を短くしようと試みて失敗したことがありますか』($\chi^2=17.757$, p=0.017)でも男女の分布に有意な差が認められ、特に問22では「たびたびある」または「いつもそうだ」と答えた割合が、20.6%と高く、問11.『思っていたよりも長く使用していた経験がありますか』でも、男子26.3%、女子38.1%と非常に高い割合を示した。問16.『携帯電話の使用が原因で、学習の能率や成績に悪影響を与えていますか』では11.1%の女子が「たびたびある」または「いつもそうだ」と回答しており、「時々ある」と答えた割合は、男子27.0%、女子30.2%であった。他に問19.『携帯電話の無い生活は、退屈で虚しいだろうと、不安に思う事がありますか』は「たびたびある」または「いつもそうだ」の割合が男子(13.8%)、女子(10.3%)、「時々ある」の割合は、男子24.3%、女子31.0%であった。さらに、問13.『携帯電話を使用し、新しく知り合いを作ることができますか』の男子20.4%、女子19.0%、問15.『他にしなければいけない事がある時でも、携帯電話の使用を優先しますか』の男子21.1%、女子27.0%、問24.『使用中に何をしているのかを聞かれた時、自己弁護をしたり秘密主義になったりしますか』の男子13.8%、女子16.7%に「時々ある」の回答が認められた。

4. 考 察

携帯電話の使用歴では、女子の方が早期から使用しているものの、15歳前後と、これまでの報告⁶⁾と同様であった。1日当たりの使用時間では、男子の85.3分に対し、女子は132.5分であった。女子の使用時間が長いことに関して、メールなどの使用が多いこと⁷⁾や、女子は仲の良い者同士のグループ化が行われ、携帯電話の所持率、使用頻度が高いという指摘がある⁸⁾。使用の量に関しては、通話やメールの使用回数から検討したものの^{6, 7)}が見られるが、本研究では、インターネット電話による長時間通話やチャット的なメール機能、ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)、ゲームなどのエンターテインメントの利用なども含めた使用を考慮し、思い出しによる平均的な使用時間を調査した。携帯電話の利用時間に関する世論調査^{9, 10)}によると、2004年では29.1分であったものが2010年には45.5分に長くなってきている。本研究では思い出し法によるため、個人差や誤差が含まれると考えられるものの、これらの世論調査は対象年齢の幅が広いことから、本研究結果とは使用時間や性別による違いがあったものと考えられる。また、操作性から、スマートフォンは支持されているものの、現在の一般型の携帯電話は、機能的にはスマートフォンとかなり近い機種も多く、世界的に見ても日本人はヘビーユーザーが多い^{3, 11)}ことから、大学生のような若年層では様々な使い方が行われ、使用時間が長くなっている可能性がある。

使用している携帯電話のタイプは、従来型である一般のタイプの使用者の割合が圧倒的に多く、スマートフォン使用割合は男子が24.3%、女子が10.3%と「スマートフォン/携帯利用動向調査2012」¹²⁾による普及率22.9%と比べ、男子は平均的、女子は低い傾向であった。しかしながら、スマートフォンの急速な普及に伴い今後その割合が増えていくと考えられる。

本研究では、スマートフォンの使用率が低く、また、使用歴、使用時間に男女差がみられたことから、本研究では依存傾向について男女の比較を中心に考察を行う。

総合得点は、全体では 32.6 点で、男子は 31.1 点、女子は 34.4 点と女子の方が高く、さらに得点分布では、女子は下位 25% 未満の得点者の割合が 49.2%、25% 以上 50% 未満が 44.4%、50% 以上が 6.3% となっていた。鄭⁵⁾ は 25% 以下を非依存群、25 ~ 75% を依存低群、75% 以上を依存高群として検討している。本研究の結果は、女子において 25% 未満の非依存と考えられる学生の割合が半数を下回り、依存傾向の可能性のある学生が存在する危険性を示唆している。これは女子の携帯使用時間が長く、特にメールとインターネットの使用時間が長いことと関連していると推測され、女子の方がメールの使用頻度が高く、依存傾向得点も高いとする報告^{6,7)} とも一致している。また、インターネット依存に関しては、依存傾向と使用時間の関連はあるものの、心理・社会的な問題は依存傾向の方が強く関連していること⁴⁾、依存得点が高い者は日常的な精神的健康が悪化し、睡眠習慣や学校への登校意欲、対人関係にマイナスの関連があること⁵⁾ などが指摘されており、検討が必要である。

そこで、質問項目ごとにもみると、使用時間にかかわる項目である『思っていたよりも長く使用していた経験』、『周囲の誰かに、使用時間について文句を言われたことがある』や『使用中に「あと 2, 3 分だけ」と自分に言い訳する』、『使用時間を短くしようと試みて失敗したことがある』で女子の方が高い得点や、依存傾向の可能性が示唆される「時々ある / たびたび / いつもそうだ」に回答する割合が高い傾向を示していた。さらに、『深夜に使用するため、睡眠不足になることがある』、『携帯電話の使用が原因で、学習の能率や成績に悪影響を与えている』といった、日常生活への悪影響を示す項目でも高い得点への分布傾向を示していた。このことは、過剰な利用に加え、それを抑制できない状況になりつつあり、その結果、日常生活に悪影響を及ぼしていることを示していると考えられ、鄭⁵⁾ の指摘と一致する。

対人関係を含めた、心理・社会的な質問である『他にしなければいけない事がある時でも、携帯電話の使用を優先する』、『携帯電話上で楽しむ事を考えて、現実の生活の問題から逃避したことがある』、『携帯電話を使用するのを楽しみにしている自分を意識することがある』でも女子の「時々～いつもそうだ」の割合が高くなっていた。対人や現実からの逃避的行動に関して、青年期では人間関係はストレスとなっていることが考えられ、インターネットが現実からの逃避に影響を与えていることが指摘されている¹³⁾。また、現実の対人関係の中で生じる劣等感に対して、ネットを介した仮想的な対人関係のなかで優越感を感じるといった行動をとっているうちに、現実と仮想の区別に支障をきたす特有の問題も指摘されている⁵⁾ ことから、逃避行動に高い得点を示す依存傾向の可能性のある者に対する対処法を検討することが必要である。

また、『携帯電話を使用し、新しく知り合いを作ることがある』の項目では男女ともに 30% 近くの学生が「時々～いつもそうだ」に回答しており、携帯を使用した出会いの機会を持つものが多いことを示していた。警察庁^{14, 15)} によればオークションなどに伴うネットワーク利用詐欺や出会い系サイトによる犯罪が増加傾向にある。また、携帯電話のゲームサイトを悪用して売春等に関与してしまうといったケースも報告されている¹⁴⁾。本研究の対象者はフェイスブックをはじめとした SNS などの健全な利用が中心であると考えられるが、携帯電話のように身近で、極めて個人的な情報ツールを使用した犯罪が身近に起きていることを考慮すると、三分の一近くの者が新しい知り合いを作るために活用している実態は注意が必要であると考えられる。携帯電話が友人の数や親密度を増加させること⁶⁾、知り合い程度の親しさの度合いの高くない友人関係を増加させる可能性があり、友人関係の形成に役立っていること¹⁶⁾ といっ

大学生における携帯電話の使用状況と依存傾向について

た報告もあることから、犯罪に巻き込まれない適正な利用方法を習得することが大切である。

一方、男子においても、女子同様に、『長時間の使用経験』や『携帯電話の無い生活は、屈辱で虚しいだろうと不安に思う事がある』といった項目では、高得点を示していた。ゲームに関わる時間は男子の方が長いことを考慮すると、依存傾向の問題は女子特有の問題ではなく、男子についても検討する必要がある。

現代において携帯電話はパーソナルコンピュータを介したインターネットにかわる、きわめて身近な情報ツールである。携帯電話について、洞澤⁸⁾は「メディアの身体化」であり、携帯電話を通じて他者とのつながりを確認するなど携帯電話に対する心理的距離が近いことを指摘している。また、インターネットへの依存傾向と日常的な精神的健康や社会的健康は双方向の因果関係があり、悪循環を起こす可能性が指摘されている^{4,5)}。本研究においても、個人的な性格なども関与しているものと考えられるが、長時間携帯電話を使用している状況を越えて、日常生活や心理・社会的な影響が懸念される学生も若干ではあるが認められた。今後スマートフォンの一層の普及が予測される中、様々なアプリケーションの広がりや多岐にわたる使用と合わせて、依存傾向が助長される可能性が懸念される。今後は、より多くの対象について、携帯電話の使用内容の拡大を踏まえながら継続的に実態を探るとともに、依存に対する予防・対策を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 川畑英毅：誰もが電話を“携帯する”までの歴史，Tech 総研（2008）
- 2) 総務省情報通信政策局：通信利用動向調査報告書世帯編，総務省，（2012）
- 3) クロス・マーケティング：スマートフォンユーザーの実態把握調査，クロス・マーケティング（2011）
- 4) 戸部秀之，竹内一夫，堀田美枝子：児童生徒のインターネット依存傾向と，メンタルヘルス，心理・社会的問題性との関連，学校保健研究52，125-134（2010）
- 5) 鄭 艶花：日本の大学生の“インターネット依存傾向測定尺度”作成の試み，心理臨床学研究 25，102-107（2007）
- 6) 渡邊紀子，久保田美雪，石崎トモイ，小柳恭子：中・高・大学生における携帯電話の使用状況と生活環境への影響に関する調査，新潟青陵大学紀要8，31-40（2008）
- 7) 吉田俊和，高井次郎，元吉忠寛，五十嵐祐：インターネット依存および携帯メール依存のメカニズムの検討，電気通信普及財団研究調査報告書20，03-01003（2005）
- 8) 洞澤 伸：若者たちの人間関係が携帯電話で始まる時，岐阜大学地域科学部研究報告 12，63-74（2003）
- 9) 中央調査社：携帯電話に関する世論調査，中央調査報568（2005）
- 10) 中央調査社：携帯電話に関する世論調査，中央調査報641（2011）
- 11) Yoree Koh：スマートフォン、日本は普及率低いがヘビーユーザー多い，ウォールストリートジャーナル日本版（2012）5，
- 12) インターネットメディア総合研究所：スマートフォン／携帯利用動向調査2012，インプレス R & D，（2012）
- 13) キバリー・ヤング著，小田嶋由美子訳：インターネット中毒，毎日新聞社（1998）

上演龍也・清水茂幸・澤村省逸・清水将

- 14) 警察庁：平成22年度中のサイバー犯罪の検挙状況について，警察庁（2011）
- 15) 警察庁：平成22年度中の出会い系サイト等に起因する事犯の検挙状況について，警察庁（2011）
- 16) 辻 泉：若者の友人関係形成と携帯電話の社会的機能，松山大学論集16，143-164（2005）